

かつて英雄と呼ばれた魔王

ナイツ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

13英雄の話をオリジナルで書いています。  
ご都合主義、ガバガバな設定、駄文、それらを許される方はご覧下さい。

誤字、脱字等は何時でも受け付けておりますので、どんどんお願ひします。

※基本的には亀更新です。

目

次

終わりと始まり

出会い

1

出会い

2

出会い

3

出会い

4

出会い

5

英雄

1

英雄

2

英雄

3

英雄

4

英雄

5

英雄

6

67 62 55 49 40 35 30 21 14 8 1

## 終わりと始まり

“ユグドラシル”

圧倒的なスケールを誇るバーチャル世界と、その中の自由度で爆発的な人気を博したオンラインゲーム。

そのオンラインゲームとしては長寿ともいえる期間を経て、今日で終わりを迎えることとなつた。

「——これで、全員かな」

ふう、と“オーバーロード”であるモモンガは一つ息を吐いた。それは疲れから来るものではなく、物事を達成した事による満足感からだ。

モモンガのしたことは、NPC達一人一人に会いながら、ゆっくりと一階層ずつ上がる。ただそれだけだ。

彼等を作成した時の事を思い出しながら見て回るのは、思つたより感慨深いものがあつた。

だが、まだやり残した事がある。と一步、自らのギルド拠点であるナザリツクから外に出る。

“飛行”を発動し空へと飛ぶと、毒の沼地を抜けてゆつくりと後ろを振り向いた。

静かな毒沼に囲まれた、ギルド“アインズ・ウール・ゴウン”的拠地であるナザリツク大墳墓は、確かにそこに存在していた。

——色々、あつたよなあ。

ナザリツクを見つけた際の事を思い出す。

ギルドを立ち上げた事。協力しあい、お互いに信頼できる仲間が出来たこと。

色々大変なこともあつた。仲間内で揉めたりしたこと也有つた。だが、何より。

「楽しかった」

楽しかった。そんな一言に、全てが詰まっていた。  
始まりは劇的なものではなかつたが、あの時の事は今でも覚えてい  
る。

——誰かが困つているなら、助けるのは当たり前！

当時流行つていた、モモンガ達異形種をPKする『異形種狩り』、そ  
れからモモンガを助けてくれた彼、たつち・みーと出会つたところか  
ら、全て始まつたのだ。

堂々と自分の意見を言える彼の強さに、モモンガは憧れた、惹かれ  
たのだと改めて感じた。

ピツ。と設定した腕時計型のタイマーが鳴る。サービス終了時刻  
の数分前に鳴るようにして いたのだ。

——結局、最後に会いに来てくれたギルドメンバーはヘロヘロ以外  
来てはくれなかつた。

「……次、何するかなあ。……全然分かんないや」

自嘲氣味に笑つて、目に焼き付けるように、再度ナザリックを見渡  
す。

自分が過ごした、宝物といつても良いもう一つの我が家を。

「……元気でな」

明日は朝早かつたつけ、早く寝なきやな……。そう思いながら、モ  
ンガはゆつくりと目を閉じた——

——数瞬後。

「つお……ッ!」

突然の浮遊感に、モモンガは大きく目を見開いた。

バタバタとはためく自分の装備服と、自分を照らす大きな満月を見て、自分が背中から落下しているのを理解する。

突風とも言える風が、背中から叩き付けられる様に吹いていた。落下していく感覚に、急いで背後を見れば、一面の草原がモモンガを迎えていた。

「おおおお?! ふ、 “飛行” !!」

無我夢中で “飛行” を発動させる。

ゲーム内では感じたことのない感覚に頭を傾げつつも、ゆっくりと草原へと着地する。

着地してすぐ、モモンガは不可視の魔法と探知阻害の魔法を起動させた。

ここが何処か分からぬ以上、下手に強いモンスターと遭遇すると面倒だからだ。

「……これは、一体どういう?」

分からぬ。

“ユグドラシル” の殆どの地帯を探索したと思うが、こんな場所は無かつた筈だ。

あくまで記憶の範疇での推測なので、絶対とは言い切れないが。取り敢えず、とメニューであるコンソールを起動させるが、何時もの様に空中に現れない。

GMコールも、その他の “ユグドラシル” へとアクセスする行為全てが、完全に沈黙していた。

それを理解して、モモンガの背筋が凍りつく。強制ログアウトも出来ない状態で、何処か分からぬ草原に放り出されたこの状況、冷静になれと言う方が難しい。

「何で、何でだよ?! 一体何が……つふう……」

急に訪れる、沸き上がった感情を根こそぎ削り取られるような感覚

に、モモンガは漸く冷静になれた。

だが何をどうすれば良いか分からぬまま、モモンガは一人呟く。

「取り敢えず、歩くか。何処かに他のプレイヤーがいるかもしけない」

——その者が、敵か味方かは分からぬが。



分かつた事がある。

「『火球』」

「ゴアアツ?!」

モモンガの突きだした手のひらから放たれた『火球』に、火だるまになりながら一体のモンスターが倒れた。

確かに下級の魔獣系のモンスターの一種だつたか、とモモンガは記憶を探つた。

一つ。今居るこの世界は、現実のものだということ。

『ユグドラシル』では無かつたモーションや、物を触つたりした際の感覚全てが、現実の物と大差なかつた。

——何故、骨の身体で触覚があるかは分からぬが。

そして、もう一つ。

「確かコイツはレベル10程度の雑魚だつた筈だが……、コイツらが弱いのか?」

草原の外れにある森の中、一つの巨木に寄りかかる様に倒れている男達を、モモンガはしげしげと眺める。

兵士の様な格好をしたそれらは、身体の所々がグシャグシャにへしやげ、元は純白であろうマントは、自身の血液で赤黒く変色していく。

死体を見た際の恐怖等は、全くと言つて良いほどに感じない。そういう置物、という感想が沸く程度だ。

これがまだ、ゲームだと思つてているからだろうか？

二つ。この世界の生き物は、（現時点では）はつきりと言つて弱い、ということだ。

「コイツらが特別弱いのか？　いや、さつきの言動を見るにかなりのやり手の筈だが……、うーむ」

コツコツと自分の頭を触りながら頭を捻るが、はつきりとした答えが出ない。

取り敢えず、弱い奴が多い。と答えを出した所で、モモンガは目の前の兵士が何か言つてることに気付いた。

不可視と探知阻害が切れたか。と確認するが、魔法の効果は持続している事を感じる。

何故コイツは感知した？とモモンガが警戒していると、兵士が言った。

「誰かは、分からぬが……、俺達を、国まで、運んで、くれないか……、頼む。頼むよ……神様」

モモンガの感知能力で理解できる程度の声量でそう言つた後、兵士はガクリと力尽きた。

何故見つかつたか分からぬ上に、更にはタクシーの様な頼まれ事をされ、モモンガは頭を抱える。

「……別に良いだろ、放つておこう」

助けたとしても、対した利益も無さそうだし、と理由をつけて。

そう自分に言い聞かせるように呟いて、兵士達とは逆方向へと行こうとしたとき、脳内に言葉が響いた。

——誰かが困つているなら、

「…………助けるのは当たり前。か」

思い出すのは、あの時。モモンガがPKされる直前で助けてくれた彼、たつち・みーの事。

——彼なら、コイツらの事を助けるだろうか。

「助けるだろうな、あの人なら」

クルリと逆方向へと足を運び、『無限の背負い袋』からポーションが入った瓶を取り出す。他の兵士は死んでいるが、彼ならまだ助かる。

グシヤリと手荒に蓋を握り砕き、ポーションを鎧の上からバシヤバシヤと2～3本振り掛ける。

体力がある程度回復したのを確認して、モモンガは男を背中に担いだ。まだ完全には回復していないため、意識がはつきりとしていないが。

さあ、行こうとモモンガが歩きだした時、男が言う。

「待つてくれ、……仲間も、助けてくれないか」

「…………彼らはもう死んでいる。私が出来るのは回復だけだ。死んだ者を生き返らせる事は出来ない」

「そうか……。なら、せめて、供養をさせてく、れ」

それきりぐつたりとして動かなくなつた男、体力が尽きたのだろうと理解して、——少しの間の後、後ろを振り向く。

本当は死者の蘇生を出来るアイテムを持っているモモンガだが、それは黙っていた。

生き物を殺せる者と、死者を蘇らせる者、どちらが重要視されるか、危険視されるかは考えなくとも直ぐに答えは出る。

だから、せめてもの手向けとして。——仲間の事を考える、そんな男への賛辞として、モモンガは手を死んだ兵士達に突き出す。

“豪火球”

ゴウツ、と業火渦巻く火球が、力尽きた兵士達に直撃する。それは

鎧、肉、骨の順で燃やし尽くし、灰に至るまで燃やした。  
辺りの木々が燃え上がる中、モモンガは漸く歩き出す。

「——これで良いんですかね、たつちさん」

ぽつりと呟いたその言葉は、誰にも届かないくらい小さく、か細い  
ものだつた。

# 出会い

1

「あれは……国か？」

時間はおそらく深夜。

戦士を背負つてしまやすく歩くと、盆地の様な場所に大きな外壁に囲まれた町を見つけた。

肉体的な疲労はアンデツドなのでまつたくないが、精神的に疲れたモモンガは何処か落ち着いた所で休みたいと思つていた。

別にログハウス（陣地作成）を使用しても良いが、ユグドラシル産の物は、万が一プレイヤーに見られた時に誤魔化す事が出来ない。

それに、この辺りの地理を知りたいと考えていた所だ。この町ならば地図の一つくらいあるだろう、と考える。

「この姿だとダメだな。一応能力値偽装も使用して——」

◆  
アイテムをゴソゴソと漁りながら、やらないといけないことを改めて感じて、モモンガはため息を吐いた。

ガチャヤリ、とドアが音を立てて開くのを聴いて、少女は目を覚ました。

暗闇の中で目を向けると、赤色のペンキをぶちまけた様な髪をした少女が、ふんふんと鼻唄混じりに近付いてくる。

「やつほー、インベルン。元氣い？」  
「エリザ……」

反射的に逃げようと身体が動くが、自身の手足へと視線を向けて自然と諦めた。

——手足には、肉を貫通するように鎖が巻き付いていたからだ。床に座つたままのインベルンを、エリザは見下すように眺める。睨み付けるように見上げるインベルンを見て、思わずつり上がる口

の端を両手で恥じるように包むと、エリザは言つた。

「ふふつ、まだアタシに従う氣はないようね。インベルン」

「……何度も言わせるな。私は貴様には属さん」

「——ねえ、インベルン」

インベルンの近くに身を下ろしたエリザは、みすぼらしい服から出ているインベルンの脚をゆっくりと撫でた。

生理的な嫌悪感を感じて身をよじらせるが、その度にずれる鎖の痛みに顔を歪ませる。

「貴女は『吸血鬼』よ。人間じゃないわ」

「…………」

「化け物は化け物らしく。本能的に生きなきや。……そう思うでしょ？」

「ツあ?!」

ブチり、という肉が破ける感覺に、インベルンは痛みで目を見開いた。

エリザの鋭い爪が、インベルンの脚の肉にゆっくりと沈み、傷口をグチュグチュと搔き回す。

「ギツ、イ、アアアアあツ?!」

「ああ、良い、良いわあ。インベルン、やつぱり貴女が欲しい……」

痛みに叫ぶインベルンを濡れた眼で眺めると、エリザは指を抜いた。

血に濡れる指を口にくわえると、味わうように舐め回す。

その光景にインベルンがゾッとするが、エリザは笑つて言つた。

「あら、吸血鬼なら当然の事よ」

「違う、私は、私は——」

「——人間なら、そんな速度で傷は治らないと思うけど?」

何も言えず呆然とするインベルンに背を向けると、エリザはドアへと向けて歩き出した。

「じゃあね、また来るわ」

音を立ててドアが閉まると、また静寂が訪れる。  
——誰か、——。

少女の小さな泣き声が、真っ暗な空間に聴こえていた。



「……何だ、この国は」

中に入ろうと門に手を掛けたとき、モモンガの感知に反応があつた。

中からは人間の気配はなく、無数のアンデッドの気配があつたのだ。

そして。

「おい、そこのお前」

「うげ、バレてた——違う違う、こっちに敵意はないです!」

姿を現すと同時に構えたモモンガを見て、冒険者服を来た青年は青ざめた顔で手を降った。

だが、モモンガが構えた理由は敵意からではない、それは——

「(あれは確か、マネーアイテムの——)」

マネーアイテム。

簡単に言つてしまえば、課金で手に入るステータスが高めの武具だ。

特殊なスキルが付かない変わりに、ストーリーの中盤まではそれで

ごり押し出来ると、ユグドラシル初心者が好んで買うことが多い武具シリーズ。

その内の幾つかを、その青年は身に付けていた。

「では、何か用かね？」

「いや、えつと、実は——」

ぐうう。

会話を遮るようになつた音に、二人の空間は凍結した。恥ずかしいのか、頭をポリポリと搔きながら青年は苦笑いを浮かべる。

「分かつた。中に酒屋があるだろう。そこで何か食べよう」「本当ですか？ありがとうございます！」

やつた！と喜ぶ青年を見て、モモンガは不思議に思う。

レベルが70以上の者であれば、感知や探査のスキルも上位の物を会得するはず。中でさまようのがアンデッドだと気付けなくとも、中の異様さには気づくはずだ。

「(もしやコイツ、低レベルプレイヤーなのか?)」

上機嫌で門に手を掛ける青年を見ながらモモンガがそう考えていると、そういうえば、と言つて青年が振り向いた。

「自己紹介がまだでしたね。俺の名前、アツシユって言います」「アツシユか、よろしく。私は——モモンと呼んでくれ」

モモン。

アツシユの目の前に立つ中肉中背の男は、そう名乗つた。

??

月明かりの光しか照らしていない道を、モモンガとアツシユは歩い

ていた。

時おり聴こえる腹の鳴る音以外は、人の声や生活音等は聞こえない。

アンデッドは居るには居るのだが、二人を避けるようにして動いている以外は、特に何もしてこない。

「(誘われているな)」

何者かの思惑を感じる統率に、モモンガはそう感じていた。

タイプからしてリツチ系か、吸血鬼系かと予想を付ける。使用可能の魔法を頭の中で確認していると、隣に居たアツシユが声を上げた。

「モモンさん、あの家でかくないですか?」「うん?」

指差す方向を見れば、ぼんやりと照らす外灯が、一軒の豪邸を囲むようにして灯っている。

明らかに罠と思えるその様子に、モモンガはどうするかと悩んでいるとアツシユが鼻をならした。

「……何か旨そうな匂い、食い物があるかも!」

「あ、おい!」

無警戒に突き進むアツシユを呼び止めるが、それを無視して進むアツシユ。

だが、次に彼が言つた言葉で、モモンガの意見は変わる。

「中に何か金目の物もあるかも!」

金目の物。

高級品。

地図。

「行こうか」

仕方ないな、うん仕方ない。

アイツ、どんどん先いつちやうもんな、監視しとかないとな、うん。  
そんな、誰に向けたか分からぬ言い訳染みた事を心の中で思いながら、モモンガも豪邸へと入つていった。

——そんな二人を、エリザは暗闇から眺めていた。

## 出会い 2

「はぐつ、もぐつ、はぐはぐ……」

「よく入るな、そんなに……」

「いや、めっちゃ美味しいんですよ、これ。今まで食べたことがないくらい。モモンさんもどうです?」

「私はいいよ」

確かに美味しそうな料理だが、幻影の肉体で覆っているだけで、食べたら確実にこぼれ落ちるだけのモモンガは、手を降つて要らない、というジエスチャーを見せる。

そんなモモンガの様子に小首を傾げつつも、アツシユはふたたび目の前の料理をパクついた。

城に入つたは良いものの、今のところ特にめぼしいものは何も無い、言うなれば無駄足というものだつた。

まだ地下が残つているので何とも言えないが、恐らくあるかは分からぬ。

「それにしても、地図すらないとはな……」

思わずぼやくその言葉に、アツシユが食べるのを一旦やめて聞く。

「あれ、旅をしてるのに地図持つてないんですか?」  
一瞬で血の気が引いた。

「……、この辺りに来たのは初めてだつたのでな。まだ持つていないのだ」

「へー……。あ、だつたらモモンさんの持つてる地図を見せ——  
「すまんちよつとトイレ行つてくる!!」

逃げるが勝ち。

そういうやそんな言葉あったな、使い方あつてんのかな、と思いつつ、部屋の外へと飛び出した。

相変わらずアンデッドはそこらじゅうに居るが、特に此方に向かつてくる者は居ない。

まあ、しばらくは此処に居て、明るくなつたら外に出て探索でもしようと決めて、時間稼ぎにぶらぶらと歩き回つた。

通路に一定感覚である窓から差し込む月の光が、優しく館内の通路を照らしている。

コツコツと音がなるだけの通路で、モモンガはふと疑問に思う。

——そう言えば、地下への道がない。

建物の構造等を見るに、少なくとも地下一階分はあつても良いはずだ。

だが、何処にも地下へ続く階段などはない。と、考えて行き着く先は一つ。

「もしかして、隠し通路か何かあるのか？」

隠し通路。

その言葉に、モモンガの中で何かが燃え上がつた。新たなダンジョンを、どんな仕掛けがあるか、どんなモンスターが居るかと期待しながら攻略するのが毎度の楽しみだった。

この世界に来て初めて楽しめそうなイベントに、モモンガは上機嫌で進む。

「さあて、何処にあるのかな？床下の仕掛けか、はたまた転移トラップか——」

——そのせいか、感知スキルに反応が出たのをモモンガは見逃していた。



「モモンさん、遅いな……」

満足するまで食べた後、大きくなつた腹を擦りながらアツシユは待っていた。

コチコチと時間を刻む時計をチラリと見ると、時間はまだ深夜帯だ。腹が膨れたせいか、少し重くなつてきた瞼を擦る。

「…………本当に、現実なんだよな。コレ」

自分の手をぐーぱーと閉じたり開いたり、動作確認の様な事を行う。

そして、何か諦めたようなため息を吐くと、自分の“無限の背負い袋”を取り出した。

ゴソゴソと漁り、ほとんど有用な物がないソレを見て、苦笑いを浮かべる。

「装備を強いのにしていたのはラッキーだつたな」

「へえ。そうだつたの」

「ああ。まあ、マネーアイテムだけどね、俺、レベル低いしさ」

「ふーん」

その声の方向へ、アツシユは振り向く。ペンキをぶちまけた様な赤い髪の少女は、近くの椅子に肘をついて、つまらなさそうに此方を見ていた。

その様子に、アツシユは苦笑いする。弱いのは事実だが、そんな顔をされてはたまらない。

「いやいや、俺だつてこれから強くなる予定だつたんだよ。装備整えたし、ある程度レベルも上がつたしさ」

「でも、貴方彼より弱そうじやない」

「うわー、それは手厳しいなあ。エリザ」

「ふふつ」

エリザは、アツシユの頬へとゆつくりとその白い手を伸ばした。特

に抵抗もなく頬を触られたアツシユは、にこりと笑う。

——その目は、異常なほど虚ろで濁っていた。

「まあ、強くなるのも良いけれど、少しはアタシとも遊んでよね」「ああ、分かったよ」

ゆっくりと溶け合うように、エリザの手が首もとへと絡み付く。エリザの顔が、アツシユの胸元から這うように首もとへと上がつていく。

アツシユはエリザの背中に手を回し、優しく、苦しくないほどに強く抱き締めた。その行為にエリザはクスリと笑みを浮かべて、アツシユの首筋を舐めた。

ねつとりと舐めたところから唾液の線が伸びると、アツシユはくすぐつたそうに身をよじつた。

そしてエリザは口の端を吊り上げ、吸血鬼特有の鋭い牙をアツシユの首へと突き立てる。

——寸前に、エリザの身体が弾かれる様に吹き飛んだ。

「ふぎやッ?!」

突然の衝撃に、間抜けな声を出しながらエリザは床を転がる。

自身がアツシユに掛けた魔法が強制的に解除された上に、自身に何かが付与されたのを感じ、額に青筋が入った。

対するアツシユは、数瞬呆然と瞬きしたあと、腰につけたハンドナイフを抜いた。

自身が身に付けている首飾りが反応を見せているのを感じ、何が起つたのか理解する。

「お前……、淫魔、いや、吸血鬼か？」

「……このガキい、アタシに何しやがつたあ！」

髪を逆立て、瞳を紅く発光させながら、エリザが怒鳴り散らした。隠す気のない殺意が、アツシユの身体に突き刺さる。初めて受ける殺意に足がすくむが、気力で立て直した。

——ビビるな、モンスターとの戦闘は練習しただろ！

この世界に来て初めて行つたのが戦闘だつた。

どう動けば良いかは分からぬ。だがイメージした動き通りに身体が動いてくれた。現実の世界ならば出来なかつたことが、ここでは出来るのだ。

エリザの身体が咆哮を上げて、弾丸の様にアツシユへと接近する。部屋の装飾品がその衝撃でぐちやぐちやになるが、アツシユはそれを見切つていた。

心臓へと突き出された腕を身を捻つてかわし、捻つた勢いそのままエリザの首もとへとアッパーを叩き込んだ。

首に打撃を受けて怯むエリザへと、アツシユは右手に構えたナイフを横風ぎに切り払う。

それを爪でガードしたエリザだつたが、まるで豆腐を切るかのように、ナイフは鋼の硬さを誇るそれをバラバラに切り裂いた。

「あ、あああ、あ、アタシの爪があああ?!」  
「イケる、イケるッ、戦える、戦えるッ！」

自らを鼓舞し、追撃をとアツシユはエリザに肉薄する。

ナイフを左手に持ち替え、エリザの横つ面に拳を叩き込もうと進んだところで、横合いから衝撃が走つた。

ごえつ、と空氣を吐き出しながら、アツシユは壁に激突する。

蹴りを繰り出したエリザは、ワナワナと震えながらアツシユを睨んだ。

「殺す。優しく殺してやろうかと思つたけどやめ、お前だけはいじめにいじめぬいて殺してやる！」

「つ、やべ——」

エリザは両手を上に組んで振り上げた。何をするか分かつたアツシユは逃げようとしたが、受けたダメージで反応が少し遅れた。

組んだ両手を床へと叩き付けると、エリザを中心として床が波打つ様に崩壊していく。

逃げるのが遅れたアツシユはエリザと共に、暗闇が広がる地下へと落ちていった。



「……何だ？」

大きな揺れを感じて、モモンガは上を見た。光一つない空間だが、アンデッドであるモモンガは昼間と変わらない状態で見ることが出来る。

あの後、壁の仕掛けから地下へと繋がる階段を発見したモモンガは、ウキウキと地下に進んでいた所だった。

改めて意識を集中し、探知の魔法とスキルを発動させる。

先程までアツシユと居た空間に、アンデッドが一体と人間が一人、反応があった。

——そして、この先にも一体、アンデッドが居る。

先程の揺れは戦闘のせいかと納得して、モモンガは足を進める。

向こうのアンデッドはアツシユでも退治できるだろう、自分は此方だ、と。

コツコツと石造りの通路を進み、その先にあるドアを発見する。

このドアを開ければ戦闘か、と理解し、変化のアイテムを解除し、オーバーロードの姿へと戻った。

何時もの魔王染みた格好に戻り、深呼吸を一つすると、テンパつてどうやつて出したか分からない『絶望のオーラ1 level1』を垂れ流しながら覚悟を決める。

使う魔法を頭に浮かべ、ドアノブへと手を掛けた所で、モモンガは

ピタリと止まつた。

「……泣いている、のか？」

ギイイ、と音を立てて開くドアの先には、鎖に繋がれたみすぼらしい姿をした少女が居た。

向こうも来るとは思つていなかつたのだろう、自身の感知を阻害する魔法を使つていたため、それは当然だ。

突然の事態に声も上げず、泣き腫らした顔でモモンガを見つめる。モモンガもモモンガで、思つていた展開と全く違うため、少し戸惑つていた。

だが、その姿には、不思議と似通つたものがあつた。

「……お前、名前は？」

「…………え、あ、い、インベルン」

「インベルンか。……いいか、一度しか言わないぞ」

モモンガは、自分でも気づかない内にそう切り出していた。  
オーバーロードのモモンガの姿を見て震える少女へと近付くと、膝をつき、手を差し伸べて言う。

「私と共に来ないか？」

——モモンガさん。よければ、私と共にギルドを創りませんか？

その手は、かつて彼自信が差し伸べられた手によく似ていた。

## 出会い 3

——さつきまでの勢いはどうしたの？

闇に染み渡る様に響く声と共に、脇腹に生じた痛みにアツシユは顔を歪めた。

「くそっ！」

地下に落ちてから、ずっとこの調子だ。向こうも完全に遊んでいるらしく、軽傷のダメージしか刻んでこない。真つ暗。

目の前に手のひらを翳しても何も見えない空間に、アツシユは本気で焦り出した。感知スキルはまだ全然な彼では、エリザと比べてこの状況に劣勢でしかない。

——次は右足ね

響く声に咄嗟に右足を庇うも、側頭部を襲った衝撃と共にアツシユは吹き飛んだ。騙された上に、なぶられていのを感じて舌打ちをつく。

このままじや死ぬ。

ふらつく頭を支えながら、アツシユはそう感じていた。それと同時に、吸血鬼の対策を思い出し、プランを組み立てながら、スキルを発動させる。

“明鏡止水”

ピタリと。まるで置物の様に静止したアツシユに、エリザは眉をしかめた。

無力な小動物の様に、痛みでのたうち回つて死ぬのを眺めるのが好きな彼女からすれば、今のアツシユの行動は少し気にくわない。

少し激痛を与えましょか。

そう考え、ならば四肢の一つでも切り落とすかと狙いを定める。そこで、アツシユがナイフを握っている右手に目が向き、自身の爪を切り落とされたことを思い出した。

あれだ、あのナイフで止めを刺してやろう。

意趣返しを含めた復讐を考え、エリザの頬がニタリとつり上がる、ならば行くかと、暗闇を音もなく進みアツシユの背後に接近し、腕を振り上げた。

——次こそ右足よ

そう囁き、一撃で腕をもぎ取る勢いを込めた攻撃を、アツシユへと叩き込んだ。



「ふむ、もう一人居るのか」

「はい。エリザという吸血鬼です」

月明かり照らす通路を、モモンガとインベルンは歩いていた。

先程の奴隸服とは違い、モモンガから冒険者用の初期装備を譲り受けたインベルンは慣れないのか装備品である茶色のマントを弄りながら歩く。

オーバーロードの姿から元の人間の姿に戻ったモモンガは、顎に手を当て考える。

聞けば、ここを仕切っているのはそのエリザという吸血鬼だという

こと。非常にプライドが高く残虐な事を好むらしい。

だが、異形種となつたモモンガからすれば、カルマ値が極悪に近いため、その様な行動を取るのだろうと推測できる。

——実際俺も、特に何も感じなかつたしな。

兵士達の死体を見たことを思い出しながら口には出さず、そう頭で思つてはいるが、インベルンが言う。

「だから、もしかするとそのもう一人のお仲間様は危ないかも……」

「いや、別に仲間つて訳じやな——」

瞬間。

目の前の壁が吹き飛び、黒い大型の何かが、モモンガ達の前に躍り出た。

四足獣の形をした巨大なそれは、全身に黒いミミズのようにのたうつ生き物を無数に纏いながら、紅く発光する眼で此方を見ている。

「エリザの『合成獣』か、また厄介な奴が……っ！」

「ああ、さつき感知に反応したのはコイツか」

悪態吐いて身構えるインベルンとは対称的に、おー、と呑気な声を上げるモモンガ。

そんなモモンガの様子にポカンと口を開けるが、すぐさま言う。「氣を付けてください。コイツらは吸血鬼の特性を兼ね備えた存在、不死性もあり、さらに群れで行動します！」

インベルンの言葉を肯定するように、壁に空いた穴から、うぞうぞと無数の合成獣が姿を現す。

先程の者とは違う姿をしているのもあり、種類も多いようだ。

全身が粟立つような甲高い鳴き声を上げて、最初に出た合成獣がモンガ目掛けて高速で突進する。狭い通路に巨体の合成獣の突進は、最悪と言つてもいい組み合わせだ。

このままでは当たった衝撃で内臓ごとぐちやぐちやにされるか、引き倒され、踏みつけられて挽き肉にされるだろう。

「モモンガさ——」

必死に助けようと手を伸ばすも、合成獣の方が早く間に合わない。

激突の衝撃音が鳴り響き、その影響で通路の窓ガラスが粉々に割れ散つた。

尻餅ついて転んだインベルンが、モモンガを探して顔を上げたところで——その異様さに気付いた。

「——どうした、こんなものか?」

片手。

片手一本だけで、合成獣の突進を受け止めていたのだ。足元を見ることなく、少しも後ろに下がった様子もない。

合成獣も異変に気付いたのか、焦った様子が見られる。脚を踏ん張つてモモンガを押すが、脚が滑るだけで少しもモモンガに効く様子がない。

「私を押すのだろう——そらつ」

ぐつ、と。一足踏み込んで、次はモモンガが合成獣を押し込んだ。ズリズリと音を立てて、合成獣が数メートル力づくで後退する。

強引に押され、少し体制を崩した合成獣がモモンガを睨むと、目の前に迫るものがあった。

足だ。人間の足。

普段なら骨ごと噛み碎いて飲み下すだけのそれが、眼前に迫つている。

今まで人間に蹴られたことはあるが、非力な威力でしかないそれは、対した脅威ではない。

そう、【普通】の人間であれば。

——首もとの何かがへしゃげる音を聞いて、合成獣は静かに意識を手放した。

「ふむ、体術はこんなものか。予想とは違つたな」

ブクブクと首もとから何かの体液を溢れさせて倒れている合成獣を眺めて、モモンガは足をプラプラと振る。

サッカーボールキックの要領で少し強めに蹴り飛ばしたのだが、思つていたより威力は高かつた。

「（本職の戦士はまだ速いだろうな……、奴で少し研究するのも悪くはない）」

戦士職であろうアツシユのことを思い出して、次に周りを見渡す。唸りながらも此方を見るだけでいる合成獣達と、信じられない物を見るような目をしているインベルンに気付いて、数瞬で理解した。唚然とする視線から、次第にキラキラと憧れを含めた視線に変わつたのを見て、モモンガの中で警鐘が鳴る。

——ヤバイ、面倒なことになりそうだ。

ならば急げと、モモンガは合成獣達に向き直る。

化け物染みた強さのモモンガに合成獣は怯むが、主人であるエリザの命令を思い出してもう一度自らを鼓舞するようになにか呟く。

先程やられた一体も、少しほの回復したのか、ふらつきながらもゆっくりとだが立ち上がつた。

こうなつたら人海戦術とばかりに合成獣達は一斉に、前から、横から、上からモモンガに襲いかかる。

「主人の命令に忠実で結構なことだ。ならば、私の“ペツト”を紹介しよう」

——出てこい、ケルベロス

獲物へと接近する数秒の間で、モモンガが懐から出した一枚の羊皮紙が蒼く燃え上がったのを見た後、合成獣の視界が暗転した。

残されたのは、身体中から響いた、何かが碎ける音だけ。

◆  
眼前に広がる星空と、その中で輝いている満月を見て、エリザは呆けていた。

自分がなぜ月を見ているのか、そしてなぜ外に居るのか、その疑問に追従するように生じた顔面の激痛に、思わず手を当てる。

ヌルリとした、ドロドロに溶けたその液体をそれを理解した時、エリザは現状を理解した。

「いつつ……、これで対等だな。吸血鬼」

自身の住みかである建物の壁に開いた穴から、脇腹を抑えながら出てきたのはアツシユだつた。

アツシユは此方を見ると、悪戯が成功した子供のようにニヤリと笑う。

「やつぱり『ポーション』での攻撃は食らうんだな。勉強になつたよ」

その言葉の後に、カチャリと音を立ててアツシユの手からポロポロとガラス片が落ちた。

以前見たことがある、人間が使う回復薬だと、エリザは思い出した。

「何で……」

「ん、あー。攻撃の理由か？それはだな」

これだ。と見せつけられたそれは、一番最初の接触の際に弾かれた首飾りだつた。

それを見て、自身に何かの付与がされたことを思い出した。

「あの時の首飾り……?!」

「そう。コイツの能力は、簡単に言えば、『戦闘時のマーキング』なんだ」

ユグドラシルでの戦闘は、何も一対一の決闘染みた物だけではなかった。

不可視、感知不可等のスキルや魔法を何重にも掛けプレイヤーへと接近し、PKや、アイテムや装備を窃盗する。などというプレイングも多々あつた。

モモンガ等の高レベルプレイヤーならば、そういう物は効かず、直ぐ様看破されていたが、アツシユ等の低レベルや発展途上のプレイヤーは、そういう対策は無いに等しかつた。

そこで出たのが、この『マーキング』性能の付いた首飾りだつただ。

課金アイテムであつたが、少なくとも暗殺や窃盗などの被害よりマシだと、多くのプレイヤーが購入した代物である。

「お前が何処に居るかは、ぶっちゃけこれで分かつては居たんだ」

「なら、何で早く反撃しなかった?!」

「それがバレて遠距離攻撃に入られたら厄介だからな、だから、決定打を入れてくるまで待つたんだよ」

油断するのを待つていた。

そう言われたも同然なエリザは、反射的に地を蹴つていた。

踏み込みによつて足跡が波打つのを見ながら、アツシユは不敵に笑つた。

——『明鏡止水』

首が吹き飛ぶかの様な衝撃を受けて、エリザは再び地面に転がつた。

さつきも受けた不可解な攻撃に、ふらつきながらもゆっくりと立ち上がる。

アツシユの浮かべた笑みが、此方が一方的に攻撃されている今の状況が、気にくわない。

「殺す、ぶつ殺してやらあツ!!」

霧状化、影状化は、マーキングされている以上また“ポーション”での攻撃が来るから却下。

ならばと、エリザは異常なまでにブクブクと膨れた腕を振り上げ、地面へと突き刺した。

——あの謎の攻撃は、近付きさえしなければ怖くはない。畳返しのように、地面が音を立てて剥がれ、土の塊がアツシユ目掛けて投げ付けられる。

アツシユがそれを回避するのを見て、エリザはニヤリと口の端を吊り上げた。

——やはり、アレは接近戦のみだ。

その少女の体躯に合わない巨腕で、土を力一杯握り締める。僅かな水分と共に握ったそれは、ソフトボール大の岩の様であった。

一撃当たれば四肢がもげ、身体であれば貫通する威力で、次々にアツシユへと投げ付けていく。

「おらあツ!!」

弾幕の中で、気合いと共にアツシユが地面を蹴り払った。目潰しの様に此方へと土煙が上がり、アツシユの姿を見失う。だが、そんなもの関係ない。

蹴り払った時の動きを考えて、次の動きへは時間が掛かる筈だ。とエリザは両手の石礫を握り締める。

ソフトボール大から、バスケットボール程まで大きくしたそれを、

今だアツシユが居るであろうそこへと投げ付けた。

土煙の幕を貫通させ、その先にアツシユの姿が見え、エリザは歓喜する。

——が。

アツシユを避けるようにして二つに別れた石礫を見ると同時に、眼前に迫ったそれをエリザは見た。

ナイフ。

アツシユのナイフだ。

吸血鬼であるエリザの爪を容易く切り落とした、憎たらしいアツシユの武器。

「——あ」

額へとナイフが突き刺さるのを感じて、エリザは今度こそ崩れ落ちた。

## 出会い 4

「殺した」

地面に倒れ息絶えたエリザの姿を眺めて、アツシユはそう呟いた。  
出会ったときの可憐な少女の姿ではなく、『化け物』と形容しても  
良い異形の姿は、確かに死んでいた。

「は、はは」

膝が震え、地面にへたりこむ。この世界に来て早々のモンスター退治より、色々とクル物があつた。

腰が抜けた為、時間をかけてゆっくりとエリザに近付いて、額に深々と刺さったナイフを引き抜く。水っぽい音を立てながら、それはあつさりと抜けた。

「……なんだろうなあ」

「おーい」

何だか、腑に落ちない。そんな事を思つていると、後ろから掛かる声に気付いた。

振り向けば、モモンともう一人、金髪の少女が、此方へと近付いてくる。

モモンが連れているということは敵ではないだろう。と、手をかけたナイフを放した。

「えーっと、そつちの子は?」

「ああ。先ほど拾つてな、インベルンだ」

まるで犬が猫でも拾つたという風な軽さに苦笑したが、インベル

ンと呼ばれた少女にアツシユは向き合う。

「初めまして、アツシユって言います。よろしく」

「は、初めまして……。インベルン、です」

僅かにモモンの後ろに隠れる様にそう言うインベルンを見て、人見知りな娘だなあ、とアツシユは思った。

さつきまでの空氣とは違い、緩んだのを感じながら、アツシユは戦闘が終わったのを再確認した。

「それにしても、吸血鬼を倒すとはな。かなりの実力者なんだな、君は」

モモンの言葉に、内心ドキリとしたものがあつた。

『ユグドラシル』なんて知らないだろうが、自身の装備の事を知られると、色々と不味いかもしねえ。

——竊盗の危険も、無いとは言い切れないから

余計な事を聞かれる前に、適当に相槌を打つてアツシユは話を変える。

「そういうえば、目的の地図は見つかったんですか？」

「ああ、書庫の様な場所を見つけてな。おそらくそこに有るだろう」

「そうですか」

この辺の地理は全く知らない、というより、自分がこの世界の、どの辺りに居るのかすら分からぬ状態だつた為、地図が見付かつたことにホツとする。

アツシユの反応を見て、少しの間を開けてモモンが言つた。

「さて、夜が明けると共に出発するとしよう。……それまでに準備をしておいてくれ」

「了解です！」

軽いサムズアップを上げて、先程まで居た城へと足を運ぶ。

夜明けまで、軽く一眠りでもしようと、アツシユは欠伸を一つした。

——そんな背中を、モモンガはじつと見つめていた。



あの程度の物か。

先ほどのアッシュとエリザの戦闘を見ていて感じたのはそんな事だつた。

自分の様な魔法職とは違い、戦士職の動きを知りたかつたが、正直に言つて杞憂だつた。

あの程度、どうとでも対処できる。

「奴はモンク職か何かか？ならば、徒手やナイフがメインなのも頷けるが……」

種族や職種が逆なのもあり、少々うろ覚えに思い出すが、さっぱりと分からない。『ヘロヘロ』がモンク職だつたが、あの人は装備破壊がメインだつたしなあ、と苦笑いする。監視ついでに同行するのだ、時間を掛けて攻略しようと、モモンガは納得した。

そんな自分の横で、じつとエリザの死体を見つめるインベルンが佇んでいた。

「インベルン」

「はい」

少し、力が抜けたような、そんな語調のインベルンが、ゆっくりと顔を上げる。

納得したような、哀しむような、そんな複雑な顔をしたあと、少しだけ笑つた。

「エリザ、だつたか。友達では、ないんだろう？」

「ええ。どちらかと言えば、私は奴隸みたいなものでしたから」

それでも、とインベルンは言う。

「好きではなかつたんですけど、なんか、こう……。何て言えば良いのかな」

エリザの乱れた髪を、服を、簡単にでも整えてやりながら、インベルンは言う。

「不思議と、恨んではありませんから」「……そうか」

エリザは吸血鬼だ。

インベルンも吸血鬼だ。

ただそれは、種族的なものであり、インベルンの意識は人間的なものが殆どだった。

——貴女は“吸血鬼”よ  
——人間じやないわ

エリザの言葉は、吸血鬼、牽いては異形の者であれば当然の言葉だつた。

確かに受けた仕打ちは酷いものではあつたが、今思えば、吸血鬼として、エリザはインベルンへと接していた。

自分が何者か、再確認させるように。

「モモンガ様、お願いがあります」

「何だ？」

此方を見上げる顔を、真っ直ぐに見つめ返す。先ほどとは違う、何かを決意した眼だつた。

「頭であるエリザが死に、その支配下にあるアンデッド達は朝になれば全て消え失せます。そうすれば、エリザの死体は、すぐにも発見されましよう。ここは、周辺の国の冒険者が、よく来ていた場所ですから」

「……だろうな」

「ですから、簡単にでも良いので弔わせて頂いても宜しいですか。朝までには、終わらせます。……エリザのしたことは確かに取り返しが付きませんが、見世物にされるのは、あまり良く思えないのです」「……分かった、許可しよう。だが、肝心の“国墮とし”はどうするんだ、死体を見るまでは、周辺の国は安心しないだろう」

「“国墮とし”は、私です」

インベルンの言葉に、モモンガは思わずインベルンを見つめ返し

た。その反応が面白かったのか、クスリと笑つてインベルンは言う。「エリザの犯した罪は、私が何年掛かっても償つてみせます。それが、見てのことしか出来なかつた私に出来ることだらうから」よいしょ、と。近くの農家の壁に掛けてあつたスコップで、インベルンは地面に穴を掘り始めた。

ザクザクと、ゆつくりとでも作業を進めるインベルンを見て、モモンガはもう一つのスコップを手に取つた。

何も言わなかつたが、共に作業を手伝つてくれるモモンガを見て、インベルンは微笑んだ。



「よーし、それじゃあ近くの国まで行きましょうか！」

体力を回復したららしいアツシユが、元気良く歩き出す。入る前は不気味だつた門も、出る今であれば、なんら変哲のないものだつた。取り敢えず、騎士を回収しないといけないなあとモモンガが考えていると、インベルンが遅れて隣へと並ぶ。

モモンガがもう良いのか？と聞くと、肯定するように頷いて、胸を張るように彼女は歩き出した。

一步一歩、確かな足取りの彼女が来た後ろをチラリと見れば、そこには真新しい墓が一つ、今さつき摘まれたらしい数本の花も添えられていた。

手作りらしいゴツゴツとした墓石には、手彫りの文字でこうあつた。

——親愛なる“家族”へ。

国堕とし。

吸血鬼としての道を進む事を決めた彼女の罪滅ぼしは、始まつたばかりだ。

## 出会い 5

商人街 “イースター”と呼ばれる、四方数十キロ程度の、大きな石壁に囲まれた小さめのその街は、様々な人々でごちゃや混ぜになつて活気に溢れていた。

ある者は物を売り、

ある者は武具に身を包み、

ある者は人を見定めていた。

それぞれがそれぞれの思惑の中で動くなか、その商人街で持ちきりのある噂があつた。

曰く、腕の立つ冒険者チームがいるとの事。

各地を旅しており、ありとあらゆる困難をも何事もなく解決し進む冒険者がいる。

今世界で騒がれている “終焉の使者” の一つを封印したとも言わ  
れ、そのチームに入ろうという冒険者も多数居るのだという。  
その名も――

「―― “英雄団” 、ねえ」

酒場の大きなテーブルに肘をついて、モモンガは咳くように吐き出  
した。

あの後、助けた騎士に連れられて来たのは良いものの、他のプレイヤーの情報はこれといってなかつた。今耳に入つたこの情報が、それらしき物くらいだ。

目線を前に向ければ、テーブルに置かれた料理にがつつくアツシユの姿が目に入った。ふわりと湯気が立ち上るそれを見るかぎり美味しそうなのだが、食べることが出来ない身体のモモンガからすれば、何の手出しも出来ない物だから仕方がない。

気遣うように横目でチラチラと此方を見ながら、具沢山のスープと柔らかなパンを食べているインベルンと目が合つた。

好きに食べろ、とアイコンタクトを送ると、パア、と喜んで目の前の料理に少しづつ手を出し始めた。まあ、ここの金は全てあの騎士が出してくれるとの事なので、特に何とも思わないが。

「すまない、待たせたようだな」

暇潰しがてら、店内にあるインテリアを眺めていたモモンガの背に、そう声が掛かった。

振り向けば、一人の男がチエーンメイルに身を包んで此方へと近付いてくる。聞き覚えある声を聞いて直ぐに思い出した。あの騎士だ。「そちらも色々と忙しかつただろう。急かしたようですか？」

「いや、大丈夫だ。……所で、聞きたいことがあるとの事だが？」

店内を歩き回る統一された制服を着た店員に何かを頼むと、モモンガの隣の席へと座った。近くに来たその黒髪が特徴的な容姿を見て、どことなく日本人に似ているな、と思つた。

「ああ。先程聞いたんだが、『英雄団』というのはどんな集団なんだ？」

コイツ（アツシユ）以外のプレイヤーが居るとすれば、有力なのは恐らくだがそこくらいだろう、というのがモモンガの考えだつた。

だが、困つたように頭をボリボリと搔いて、騎士は「実は……」と口を開いた。

「今回の遠征だが、その『英雄団』の連中を探すのが目的だつたんだ。だが……」

「失敗した……と？」

「ああ、一匹のモンスターに部隊を潰されてな……、あの方に助けて貰えなければ私も死んでいただろう」

騎士の言葉に、スペイシーな香りのする麺状の料理を啜つていたアツシユが顔を上げた。

「あの方つて、誰かが助けてくれたんですか？」

アツシユの言葉に、騎士は「ああ！」と肯定して立ち上がった。

その勢いに座つていた椅子が倒れて、何事かと周囲の目線が集まつた。騎士の頬んだ飲み物と軽食の様なものを運んできた店の女性店

員を見て、ようやく冷静になつたのか、顔を赤らめて椅子に座り直す。「失礼した……。話を戻すが、私を助けてくれたその方は、絶大な力を持つ漆黒の魔法使いだつた。その時は死に体だつたため、あまりよく見えていなかつたが、それだけは覚えている」

「漆黒の魔法使い……」

「ああ。何せ、剣も通らぬ程強靭な毛皮を持つモンスターを、灰すら残さず焼き尽くす魔法を放つたからな。……そして、私の部下の弔いもしてくれた、慈悲深き御方だ」

思い出すように目を閉じて、話に区切りを付けると持つてこられた飲み物に口をつけた。隣に置かれた軽食に手をつけ、手早く飲み込むとモモンガへと向き合う。

「実は、モモン殿にお願いしたいことがあります」

騎士の言葉に、ある程度の予想は付いたが、頷きを返して先を促した。

それは、此方としても願つてもない事だろうから。

「モモン殿が各地を旅しているのはここへ来る道中に聞きました。そこで、急がぬ旅であるならここ、イースターに少しの間滞在してはいいただけないだろうか」

「……理由をお聞きしても?」

騎士は少しの間迷つたように顔を下げたが、次第に口を開いた。  
「早い話、時折やつて来るモンスターに手を焼いているのです。ですから、出来れば……」

「——モンスターの間引きをしろと?」  
「そうなります」

よしよし、良い流れだ!

その言葉に、うーむと腕組みをして悩む振りをしながら、モモンガ

は内心ガツツポーズをしていた。

この町にいれば情報が定期的に流れてくる。地理も、この世界の知識も知らない身からすれば棚ぼたな展開だ。

「勿論、望むなら住居の方も用意させていただく。だから――」

「分かりました。今のところ、宛もない旅ですから」

次の行き先を決めるまでは。と締めると、騎士はモモンガの手を取り強く上下に振つた。一瞬、幻術を纏っているだけの肉体を触られるかとヒヤッとしたが、『魔法鎧』を使用しているのを思い出して杞憂に終わる。

「では、これからよろしく頼む、モモン殿」

「ああ、よろしく頼む……」

そこでふと、目の前の男、騎士の名前を聞いてないことに気付いた。……思つてみれば、この世界でこの世界の人間の名前を知るのは初めてだ、と隣でパンを頬張つているインベルンをチラリと見てから思う。

「すまない。名前を教えてもらえないか?」

その言葉に、そういえば!と顔を驚かせた後、コホンと息を一つ。

「私は、シルヴァ・ストロノーフだ。よろしく、モモン殿」

シルヴァ・ストロノーフ。

好感的な笑顔と共に差し出された手を握り返しながら、モモンガは確かにその名を頭に刻んだ。

◆  
「えーと、こっちか」

一行の腹ごなしを済ませた後、三人は用意されたという住居へ向けて足を進めていた。美味しいものを食べて腹が一杯なのか、インベルンは何処か機嫌良さそうに周りをキヨロキヨロと見ながら歩いていく。

身に付けている駆け出し冒険者専用の装備を見ながら、近いうちに専用の装備を見繕わないとな、と考えていたモモンガに声が掛かる。

「モモンさん」

アツシユからだつた。珍しく静かにしていた為気付くのが遅れたが、何処か眞面目なその雰囲気にモモンガは改めて向き合つた。

「ちょっと、話したいことがあるんです」

「ああ、やっぱこうなるか。

「良いぞ」と返しながら、モモンガは内心そう思つていた。

# 英雄 1

“商人街”イースターから少し離れた、一面草原が広がる大地。少し陽が沈みかけた時刻、モモンガとアッショウは対峙していた。インベルンはイースターにそのまま残り、用意された住居でシリヴァや管理人との顔合わせをしている。多少の不安はあるが大丈夫だろう。

そう考え事をしていると、視界の先でアッショウの膝がぐつと下がった。溜めるような動作の後で、

「シイツ！」

「おつと」

側頭部に向けて後ろ回し蹴りを放ってきたアッショウを頭を下げ回避する。蹴りの反動で正面に身体を向けたアッショウは、そのまま踵落としの要領でモモンガの首筋に脚を振り下ろした。

飛び込み前転で前へと回避し、モモンガが背後を振り向けばアッショウは既にモモンガへと肉薄していた。

素早いパンチを数発、その後に大振りのパンチを一撃。ボクシングに似たワンツーの攻撃を見て、避けながらモモンガは言う。

「それだけ動ければ、充分だと思うが？」

「軽々避けといてよく言うッ!!」

“英雄団”に入りたい

それがアッショウが話した内容だつた。

まあ、プレイヤーが居るとすれば今のところそこが一番有力だろうし、モモンガとしては特に反対する提案でもない。だが、そこで一つの疑問が発生した。

果たして、自分の実力はどれ程のものなのか

既にかなりのレベルであつた“吸血鬼”的エリザを打倒したアツシユではあつたが、それは相性やアイテム等、別の要因での勝利でしかない。エリザへの有効打を思い出してみれば、“首飾り”や“ボーション”での不意討ちや、武器であるハンドナイフが主だった。単純な肉体技の勝負ではどこまで通じるのか、それはまだ試してなかつた。

そのアツシユの提案に、モモンガは即座に快諾した。レベル100とはいえ魔法職であるモモンガは、低レベルとはいえ戦士職であるアツシユに自分がどこまで戦えるか知りたかったからだ。

「ふん！」

「つと」

腕を振り払いアツシユを退かせると、モモンガは昔漫画で見たバトルキヤラの構えをした。アツシユと同じボクシングに似た構えではあるがステップは踏むことなく、大地をしつかりと踏みしめて立っている。

「次は此方から行くぞ」

モモンガの言葉に、アツシユは身体を硬直させることになった。

別にビビった訳ではない、モモンガが行つたのはただアツシユへと踏み込み、そして殴りかかるだけ。

——但しアツシユがそれに気付いたのは、モモンガの拳が眼前に迫つてからだつた。

「ツ?!」

ブリッジするくらいに背を倒すと、そこをゴウと風切り音を立てて拳が通過した。モモンガが腕を折り畳み肘を振り下ろすのを見て、アツシユは身体を横廻ぎに回転させ受け流し、バツクステップで距離を取る。

嫌な汗が全身から流れ、ピリ。ピリとしたモノがアツシユの身体を突き刺した。それと同時に、一つの確信を得た。

この人、エリザより強い！

動きは何だかぎこちないものがあるが、それを差し引いても速度と力が段違いにも有りすぎる。

低レベルとはいえ生糸の戦士職である自分より強いと感じて、思わず乾いた笑いが出た。

そのアツシユの様子に、モモンガが疑問符を浮かべる。

「どうした、もう終わりで良いのか？」

「冗談ッ!!」

アツシユの意気込みに、モモンガは軽く笑つて構え直す。また同じように踏み込もうとしたとき、アツシユはスキルを発動した。

「“明鏡止水”」

来た。

アツシユが発動させたスキルを見て、モモンガは動きを止め冷静に観察する。

エリザの時に見たときはカウンターの様に見えたスキルだった。発動のタイミングと、その結果を見たモモンガからすればおおよそのスキル効果は予測できるが、それはそれ、予測でしかない。

取り敢えず、と後ろに伸ばした脚を踏ん張り、前に両手を突いて前屈の構えを取る。

俗に言うクラウチングスタートの構えから、踏み込んだ脚が地面を捲り上げながら、モモンガの身体は弾丸の様にアツシユへと肉薄した。

今度は正面からではなく、背後へと回り込み背中目掛けて受けければタダでは済まないであろう貫手を放つ。

だが。

「ハツッ!!」

「……なるほど」

当たる直前で先程した回し受けで避け、アツシユはモモンガへと蹴りを放つた。

一瞬の内に横腹へと受けた一撃を感じながら、モモンガは納得がいったように頷く。

“明鏡止水”

要するにそれは、 “後の先手” を優先的に取れるスキル。自らの身体を静止させ、相手からの攻撃を待つ “クロスカウンター専用” のスキル。

それならば――

足元の拳大の岩を蹴りあげ、それを掴み取ると握力で数個に碎いて分ける。ピンポン玉程の大きさになつたそれらを持つと、アツシユが分かりやすく青い顔をしていた。

「……うげ」

「おや、先程の技はもう良いのか？」

「分かつてるくせにい?!」

自身に迫る岩の弾丸を、奇声を上げてアツシユはひたすら避ける。顔ギリギリにかすつた弾丸に危ねえと安堵のため息を上げるより先に、既にモモンガが接近していた。

そのままアツシユの襟首を掴み取り地面へと引き倒す。視界が揺れたアツシユが次に見たのは、目の前に迫つた拳だった。

「……ギブで」

「ああ、お疲れ」

力なく地面へと頭を降ろしたアツシユに、モモンガは楽しげに笑つた。



「さつきも言つたが、そこまでの実力があれば”英雄団”にも入れるだろう」

「いやー、負けた後だと素直に安心出来ない……」

トボトボと歩くアツシユ、その前をモモンガが歩いていた。そろそろ夕暮れで、山の向こうへと陽が沈んで行く。

ポツリポツリと会話を交わしていると、不意にモモンガが顔を上げた。それに気付いたアツシユが、モモンガの視線を辿るように視線を送る。

そこには。

「あれって、馬車ですか？」

「どちらかと言えば人ではなく積み荷を積む方だろうがな。……何かに追い掛けられているようだ」

土煙を上げながら、かなりのスピードで馬車が草原を走つてくる。その距離が近付くにつれて、後ろに居るモノの正体が分かつた。

「あれは……オーガか」

「トロルみたいなものも数体居る……」

総勢10体。オーガ、トロル、ゴブリンと、”ユグドラシル”では見慣れたモンスターが馬車を追い掛けていた。馬車を引いている馬も疲れてきているのか、徐々に距離を詰められている。

その時、モモンガが何かをする前に隣にいるアツシユが地を蹴つた。ハンドナイフを逆手に持つと、瞬く間に数百メートルあつた距離を風のように駆ける。

「オラアツ!!」

「ゴアツ?!」

「ギツ!!」

自身の数倍はある背丈のトロルへと接近すると、スピードもそのまま膝を蹴り碎いた。ゴキリという鈍い音の後、体勢を崩した巨体の脳天にナイフを振り下ろす。

それに気付き応対したゴブリンの頭部を、トロルの持つていた石斧で叩き潰した。

アツシユの乱入でモンスターも混乱したが、別のトロル、オーガが挟み撃ちの様に石斧と金棒でアツシユを迎撃する。通常なら挟まれて潰される所だが、今のアツシユは違っていた。

「――“明鏡止水”」

眩きの後に、死が振るわれる。そこには無惨にもグシャグシャになつたアツシユの死体が――有るわけでなく姿そのものが消えていた。

何処に行つたのかと、トロルとオーガが辺りを見渡し、オーガが逆方向に首を向けた瞬間、何かが碎ける音と共に首が数回転した。

「さあ、次ッ!!」

??

圧倒的だな、ていうか楽しそう。

加勢が必要かと考えていたモモンガだったが、目の前のアクション映画張りの光景をおー、とただただ眺めていた。

ほぼ一撃で敵を沈めているアツシユを見て、あちらはもう大丈夫だろうと無視して馬車へと近付く。

ツンと鼻につく植物の青臭い香りを感じながら馬車の中を見れば、そこには一人の男が居た。

此方を見て、カタカタと震えている。まあ、今の今までモンスターに追われていれば恐ろしいだろうが、ほんの少しだけ傷付いた。

「あー……、大丈夫か。安心しろ、助けに来ただけだ」

「あ、ありがとうございます、……っ！」

「ん?」

モモンガの背後に向けられた男の視線を辿れば、そこでは一体の上位種のオーガが金棒を振り上げていた。アツシユの方をチラリと見て、視線が此方に届いていないことを確認すると、モモンガは口角を吊り上げた。

さて、それでは使つてみるとしよう。

先程は戦士職の“真似事”をしたが、自分はコテコテの魔法職。確かにヒーローさながらのアクションも楽しかったが、此方も忘れてはいけない。

ドシリと、振り下ろされた金棒を片手で難なく受け止めると、オーガの身体へと手を向ける。驚きの顔をするオーガを見て、モモンガは頭の中で使用する魔法を決定した。

「済まないな。この程度、ダメージには含まれないんだ。『龍雷撃』」  
翳した手から、バチバチと蒼白い発光が生まれる。それは猛る龍を形作り、その身を蠢かせながらオーガへと喰らい付く。

一瞬で全身を硬直させると、焦げ付いた臭いを出しながらオーガは音を立てて倒れた。

「モンスターの間引きを頼まれていたが、これは思つたより深刻な様だな……」

シルヴァ等の兵士隊では、この程度のモンスターすら満足に倒せないことは、先日の出会つたときに確認している。だとすれば、間引きの依頼は早々に行動した方が良いだろう。

「モモンさん、大丈夫ですか？」

やつぱり魔法も良いなー。と考えていると、戦闘を終えたアツシユが此方へと来た。ナイフに血が付いたのか丹念に拭き取っている。

「ああ、平気だ。そつちも終わつたようだな」

「はい。……もう日も沈みますし、街まで急ぎましようか、荷物持ちますよ」

ぐつたりとして動かない馬を見て、アツシユがそう提案する。まだ現状をうまく飲み込めていない様子の男だが、コクコクと頷いて

◆ 肯定していた。

「遅くなつたな、インベルンも待ちくたびれただろうか」「でしょうね。まあ、お土産もあるし、帰つたらゆつくりしましようか」

「そうだな……」

夜になり、辺りを照らす月明かりと少しの街灯の中をモモンガとアツシユは歩いていた。二人の手には大きな革包みが複数あり、口から食材が溢れるかの様に顔を見せている。

あの後、男の家まで送つていくとお礼としてこんなに食材を譲つてもらえたのだ。男の家はこの辺では裕福な部類に入る家で、コネクションが一つ増えたとモモンガは内心上機嫌だつた。

「そういうえば、最後の動きは綺麗に出来ていたな。また一つ成長したんじやないか？」

「え、そうですか？結構無我夢中だつたものですから、あまり覚えてないですね」

あはは、と恥ずかしげにアツシユは笑う。その様子に、ふと疑問に思つたことをモモンガは口に出した。

「助けに行つたのも早かつたからな、何か特別な理由でも有るのか、恩を売りたかったとか」

モモンガの言葉に、キヨトンとした顔をした後で、アツシユは違いますよ、と言つた。

「モンスターに追い掛けられている馬車を見て、ああ、あの人は今ピンチなんだなつて思つたら勝手に動いてました」

アツシユのその言葉に、モモンガはいつの間にか立ち止まつてい  
た。その事に気付かずアツシユはだつて、と続ける。

「困つてる人が居たなら、助けたいから」

月明かりに照らされたその顔は、満足そうに笑みを浮かべていた。  
その顔に、言葉に、浮かんでくる言葉をモモンガは言う。

「“困つてる人が居るなら、助けるのは当たり前”、か  
「うん。——それが、俺の“夢”だから」

——自分にも、出来るのだろうか？

“正義の味方”に憧れ、それを恥ずかしげも無く語っていた恩人の  
事を思い出す。

馬鹿正直な程単純なその夢物語を、されど眩しいくらいのその理想  
を、モモンガは心に刻んだ。

「遅かつたですね」

「誠に申し訳ない」

腹を空かせて待つっていたインベルンを御機嫌取りで何とか宥めた  
のは、その後の話。

## 英雄2

それは突然來た。

コンコン、と控え目なノック音が聞こえ、朝食を摂っていたアツシユとインベルンは目を合わせた。

何時もなら一緒に食事しないモモンが積極的に行つてくれるのだが、生憎と朝から何処かへと出でている。仮にモモンだとしても、こうしてノックすることはしない。

互いにフォークやスプーンをコトリと皿へと置いて、数瞬の後に片手を突き出した。

インベルンがグー、アツシユがチョキ。ガツツポーズをして再び食事に戻るインベルンを半眼で忌々しげに見ながら、アツシユはドアへと急ぐ。

「新聞なら間に合つてますー」

「いえ、組合の者ですけど……」

見慣れた制服に身を包んだ女性が、困惑した顔で立っていた。確かに受付の人だろう。

朝も早くから何の用だろうと思うと同時に、一通の便箋を差し出された。裏の差出人を見れば、組合のお偉いさんの名前がある。

「上がお話があるので事務の方へ来てもらえないかと。モモンさんは御在宅で？」

「いや、朝から姿が見えないですね。因みに、何の御用事で？」

アツシユがそういうと、受付嬢は周囲を軽く見渡し、ずいとアツシユへ顔を近付ける。女性らしい甘い香りがフワリと感じ思わずドキリとしたが、理性で抑え込んだ。

「実は、『英雄団』の方が御二方に会われたいと」

## “英雄団”

その言葉に、アツシユは一気に目が覚めた。



「えーっと、此処がこの川だな、と」

“飛行”を解除しながら、モモンガは陸地へと降り立つた。手に入れた複数の地図を手にしながら、周辺の地理や国を確認していく。ふと視線の奥に広がる山々へと目を向ければ、そこだけ別世界のように暗雲が広がっていた。まるでRPGの魔界のようだ。

——あの場所に、“終焉の使者”と呼ばれる者が居るのだろうか？そんな事を考えながら、モモンガは作業を続けていた。

昇ってきた太陽を確認して、そろそろ時間だと呴く。あまりに遅くなつても、余計な心配を掛けるだけだ。

“飛行”的能力が付与された羽がモチーフのペンドントを起動させる瞬間、何かが感知に引っ掛けたのを感じて、そちらへと顔を向けた。

森の茂みしかなかつたが、気付かれたことが分かつたのか、割りとすぐに姿を現した。

——そしてその姿に、モモンガは息を飲んだ。

純白を思わせる白銀に輝く鎧

「たつちさ——」

いや、違う。

似ているが、違う。

その事実に落胆しながらも、意識を変えてその相手を見る。此方を警戒しているのか、じつと棒立ちしたまま此方を見つめている。

「たつち？」

鎧の中で声を上げているためか、くぐもった、少し聞こえにくい声

が聞こえた。

仕方ないとは思いつつ、モモンガはいざとなれば使う魔法を幾つかピックアップしながら返答する。

「ああ、知り合いに似ていたのでね。だが人違いの様だ、すまない」

「たつち……、たつち……」

「…………おい」

此方への返答を無視して、一人の世界に没頭し始めた鎧を見て、軽く苛立ちが募る。

いい加減にしろ、と言おうと口を開けたところで、目の前のソイツは言つた。

「ふれいやー？」

ドクリと、無い筈の心臓が跳ねた。鎮静のエフェクトが走り、即座に平静を保つが、遅かつた。

鎧が不意に上へと片手を振り上げ、何かを放り上げる。それは真っ直ぐ空へと飛んで、パンとけたたましい音と共に弾ける。

それが何を意味するか？

「くそ、仲間を呼びやがった！」

ユグドラシルでは日常茶飯事な行動のため、特に考えること無く空への逃亡を選択する。ペンドントを起動して空を見上げた瞬間、眼前にそれは迫っていた。

鎖状の物の先に、大きな鎌。俗に言う鎖鎌が、モモンガの顔面目掛け飛び込んできている。

——別に当たつてもダメージは受けることは無いが、どうする。

「“時間停止”」

悪手だ、くそつ。

一瞬、一瞬だけ、アツシユの持っていた“状態異常付与”的アイデムが脳裏にちらついた。

此方の手札をあまり見せたくない為、そして万が一起こる問題の回避の為、低レベルであろう奴等にはバレにくい“時間停止”を発動。

止まつた世界の中で感知を広げれば、幾つかの存在を把握した。鎖鎌もその中の者が放つものであり、草陰から鎖が伸びている。取り敢えず仕返しに軽く“雷撃”でも、と思ったところで、音が聞こえた。

「…………」

ゆつくりと、ブリキの人形のように音の方へと首を向ける。今は時を止めた状態、“低レベル”には動ける筈がない。

視線を向ければ、ギチギチと鈍い音を立てて先ほどの鎧が蠢いていた。何かの拘束から抜け出そうとするように、ゆつくりと、だが次第に速く、動き出している。

ヤバい、ヤバいヤバいヤバい!!

彼我の中間地点へと手を向け、迷うこと無く“火球”を放つ。地面に着弾し土煙を上げたのを確認して、“上位転移”で遙か先の地点へと転移した。

転移して即気配殺しのスキルを使用し、周囲の安全を確認する。敵性生物の存在が無いことを確認して、モモンガははあと息を吐いた。  
「やつぱり、居るんだな……」

ぶれいやー?

先ほどの言葉が、モモンガの脳裏に濃く残っている。  
この世界で、自分への危機になるであろう存在。  
この世界で、一番に警戒しておく存在。

「……ふう、落ち着け。あの場では一人だけ、いや、もしかしたらわざと動かずに居たかもしれない。だとすれば複数人？……までまで、嫌な想像ばかりするな、俺」

ああ、こんな時。

こんな時に、仲間達が居てくれたならば。

「くそつ、落ち着け。落ち着け……」

モモンガの言葉とは反するように、鎮静のエフェクトは絶えず、暫くの間発動していた。



「……大丈夫ですか、モモンさん」

「ああ」

家に帰れば、アツシユとインベルンの姿が見えない。ならばと思い組合へと顔を出してみれば、応接用の木製テーブルに並ぶ二人が見えた。

その向かい側では、組合の長であるシユディックと、派手な色合いの服装をした女性が目に入った。

その服装を見たとき、外国の兵隊を思い出したがすぐに心に仕舞う。

此方を気遣う様に言うアツシユに片手を上げて返事すると、インベルンが軽く身を寄せてスペースを作る。ありがたく座ると、柔らかい獸革のソファーの感覚が妙に心地良かつた。

「おや、お疲れのようで、モモンさん？」

「ああ、これは見苦しい所を。……良ければ、名を教えて頂いても？」  
「私はリグリット。本名は長いからリグリットだけで良いよ」

ケラケラと楽しげに笑うその女は、不思議と場を和ませる雰囲気を持っていた。二三自己紹介を交えて会話をした後、本題へと移る。

「それで、今回はどのような目的で？」

モモンガがそう切り出すと、リグリットはそうだった！と軽く手を打つてリアクションをとつた。

その様子に若干気を抜かれつつも、繰くりグリットの言葉に意識を集中する。

「モモンさんに、<sup>ウ</sup><sub>チ</sub>英雄団に入つて貰いたいなあつて、思つてさあ」

## 英雄 3

——どうしてこうなつた。

街の中央広場、普段なら人々が行き交うだけのそこで、一際大きな人だかりが出来ていた。

その中心にいるのは4人。

今にも飛び掛かりそうな気迫のインベルンと、何時にも増して真剣な眼差しをするアッショ。

それに対するは楽しげに、されど挑戦的に笑みを浮かべるリグリット。

そして、その二組を取り仕切る審判を担当するモモンガ。

——いやあ、本当に。

「どうしてこうなつた……」

周囲の野次などの喧騒を聞き流しながら、モモンガは顔に手を当て溜め息を吐いた。

??

時間に戻すこと10分前

「——分かりました。英雄団への加入、お受けしましょう

「本当かい？それは良かつたよ」

ニコニコと笑うと、リグリットはふうと安堵の溜め息を洩らした。今までの雰囲気とは変わるその仕草にモモンガが僅かに首をかしげると、リグリットは笑う。

「いや、実を言うと次の相手がまた強くてさあ。モモンさんが入つてくれなきやどうしようかと」

「そうなんですか。……因みに、敵の姿は？」

「はつきりとは見てないよ。見る前に味方ごと魔法で吹き飛ばされたからね」

「なるほど……」

——おそらく此方側ユグドラシルだろうな。

この辺りのモンスターの強さとこの世界での強敵のランクは、この数週間で良く分かった。

少なくともゲームとしての“ユグドラシル”で作業として狩り続けたモンスターならば、最小限の魔法と手持ちの武器で幾らでも駆逐できる。

“英雄団”に入るのもそれだった。他にプレイヤーが居たとして、そいつらが入ってくるか、居るという情報を得るなら加入するのが一番確率が高い。

——万が一戦闘となつたとしても、周りに居るコイツらを盾にすれば良い。

「つと……」

「?」

「どうかしましたか、モモン様」

「いいや、何でもないさ」

盾にする。という考えに、それを振りきるように頭を振る。側に居るインベルン達が疑問符を浮かべるが、何でもないと誤魔化した。

アンデッドであるのが原因だろうか、最近人間に対する見方が酷く変わつてきている。以前は死体を見ても少しだけ胸にしこりが出来る程度だつたが、今では何も感じない。

いや、ならインベルンはどうだろうか。初めとは違い、今ではアッシュと友好な関係を築いて――

「——モモンさん?」

此方を覗き込むような視線に気付いて、意識を目の前に向ける。そこには懐からゴソゴソと小さな袋を取り出したリグリットが、首をかしげて此方を見ていた。

「えーっと、うちの仲間内の印渡したいんだけど、大丈夫?」

「ああ、すみません、少し考え方を……。それと、気軽に『モモン』で良いですよ」

「そう? ジャあこれからよろしくね、モモン」

コトリと目の前に置かれた物は、小指の先ほどの鉄製の物だつた。一本の剣をモチーフにしたであろうそれは、小さいながらも僅かに重い。

指輪の形をしたそれを眺めていると、リグリットが手を差し出して言う。見れば、リグリットの指にも同じものが着けられていた。

「まあ、適当に嵌めててよ。鎖に通して首から下げるのもアリだからさ、そこは個人の自由」

「分かりました」

モモンガが懐に仕舞うのを見て、リグリットはそのまま袋をしまった。まだ受け取つていないアツシユとインベルンが戸惑う中で、リグリットは立ち上がつて言う。

「じゃあ、このまま行こうか。今味方とは離れてるんだけどさ、集合の場所は決めてるから案内するよ」

「ちよつと待つてください。二人には渡さないのでですか?」

「え、うん、そうだよ……?」

何言つてんの、コイツ。とでも言いたげなリグリットは此方に再度向き合つて言う。

「アタシが誘つたのはモモン一人だから、他は弱そうだし要らないよ」

アツシユとインベルンの二人は数瞬呆けた様にしていたが、理解すると勢い良く立ち上がりグリットへ噛みついた。

「な、何で？モモンさんは私達の仲間です、なら私達も行くべきでしょ！」  
「そうです。それに、モモンさん程ではないけど俺もかなり強い方だ！」

二人の言い分を聞いて、うんうんと相づちを打つように頷くと、リグリットは口を開く。

「確かにね、そりやそうだ。突然来て仲間貰つてトンズラ……、そんな真似されたら確かにアタシでもキレる。うん。……でもね」

ゆつくりと顔を上げ、二人を真っ直ぐに見つめるリグリット。その顔には、明確な殺氣があつた。

「アタシ達が戦うのは死んで当然の“強敵”なんだ。子供の來ていいい場所じゃない。……幸い、見たところこの辺じや食つていってるんだろう、ならそれで良いじゃないか」

殺氣を納め、元の快活な表情へと戻るとよしつ、と気合いを入れる。モモンガの手を取つて進もうとするその姿に口を開こうとした時、リグリットの腕をつかむ姿があつた。アツシユだ。

「諦めきれない……」

絞り出すように、言葉を紡ぐ。

「諦めきれない、俺は困つて いる人を助けたい……ヒーロー英雄になりたいんだ。もう後悔なんてしたくないんだ!!だからお願ひします。俺も一緒に連れて行つてください！」

その気迫に、リグリットはしばらく声が出なかつた。長く感じる間の後、モモンガが口を開く。

「私からもお願ひします。彼にチャンスを与えてくれませんか」

モモンガの言葉も受け、少し三人を見つめた後、はあ、と諦めにも似た溜め息を吐いた。

「分かつた。チャンスをあげよう、但し一度だけだよ」

その言葉に、アツシユは全力で頷いた。

??  
そして、今に至る。

「何でやねん」

モモンガは一人、誰にも聞こえない音量でツツコミを入れる。  
アツシユの願いを聞いたのは分かつた。  
その為の二人の入団テストをするのも分かつた。  
……何で、こんなにも人通りの多い中で行うんだ?

周囲を埋め尽くさん限りの人、人、人。

人垣、肉のカーテンという言葉がモモンガの頭をよぎるが、続く事態に即座に意識を切り替える。

そして頭を悩ませるもう一つが。

「——おやおや、そんなに見つめちゃあ照れちまうよ。自分に無いモノがそんなにも羨ましいかい?……胸とか」

「うつさい!このド派手な年増女め!直ぐに叩きのめしてその余計な脂肪も引きちぎつてくれる!」

「やはり嫉妬か。……小便臭いお子様はキレやすくて扱いやすいねえ、お嬢ちゃん」

「また馬鹿にしおつて……ぶつ殺す！」

リグリットとインベルンの、（一方的な）煽り合いが始まっていること。

——やめてあげて、その子ガラスのハートだから、豆腐メンタルだから。

一緒に居るアツシユが宥めるが全く効果が無いのを見て、モモンガは諦めたように溜め息を吐く。

そろそろ頃合いかと歩を進めると、両者互いの間合いに入った。  
「それでは、再度ルールの確認から。殺しは無し。武器の使用、魔法の使用も無し。武技、スキルの使用も勿論無し。単純な殴り合いで決着を着けるように、良いか？」

モモンガの言葉に、頷きと言葉が返ってくる。一二三後ろに下がると、モモンガは上げた片手を振り下ろした。

先に動いたのはインベルンだった。

身を屈め、流れるようにリグリットへと接近すると、屈めた下段の状態から踵をリグリットの顔目掛けて打ち上げる。リグリットはそれを首を振つて避けるが、インベルンはそのまま振り下ろした足でリグリットの足元を払つた。

ぐらりと体勢を崩したりグリットに口の端を吊り上げると、インベルンは倒れる身体に合わせて後頭部へと膝を合わせる。

完璧なタイミングに勝利を確信するも、それは一瞬で終わつた。

タン、と崩れる体制のまま跳ねると器用に一回転して攻撃を避けた。驚くインベルンへと肉薄して、リグリットは笑う。

「甘いねえ、油断するのは相手の息の根止めてからさ」

「いや、これ殺し禁止だから、そりやつ！」

援護とばかりにアツシユが横合いから拳を繰り出す。避けやすいテレフォンパンチだ、リグリットが回避したところを抑え込んでお仕舞い。

——の筈だつた。

「どうつ?!」

目に飛び込んできたそれをくらつて、アツシユは呻き声を上げて動きが止まる。

砂利か、と気付いたのは僅かに見える視界から見えた物と、不敵に笑うリグリットの姿だった。

腰溜めに構える姿に遅れて防御をするが遅く、リグリットの拳が鳩尾へと突き刺さる。吐き気を抑えてそれでも立ち上がるが、飛び込んできたのは見慣れた少女の姿。

衝撃と共に大きく吹っ飛んだ二人は、地面を数回転がると漸く止まつた。

「まだやるかい？ 生憎と、相棒は動けないようだけどね」「…………く、そつ！」

「アンタ、——アツシユは確かに動き、パワーは優秀だね。でもそれだけさ。無能なモンスターは狩れても、『<sup>ア</sup>戦士職<sup>シ</sup>達<sup>ダ</sup>』の敵じやあない」

パツパと、服に着いた土埃を軽く払うとアツシユへと近付き、顔を近付けて言う。

「アンタ程度、『<sup>う</sup>英雄團<sup>ち</sup>』には腐るほどいるよ」

普段の明るい様相とは違い、冷酷に、淡々と事実を述べるその言葉を聞きながら、アツシユは意識を落とした。

結果は呆氣ないものだつた。

「さあー、帰つた帰つた！　今日はもうお仕舞いだよ！」

パンパン、と手を打ち鳴らしてリグリットは人垣へと声を掛ける。その言葉を受けて、一人、また一人と人垣が崩れていく。「良い勝負だつたぞー」、「惜しかつたなー」等の声も聞こえるが、生憎と頑張つた本人達には届いていない。

ダウソーンしている二人を介抱し、日陰の落ち着いた場所へと寝かせる。……氣絶だけで、特に後遺症は無さそうだ。

「——一人共入団で良いよ。雑用だけどね」

リグリットの言葉を、初めは何を言つてゐるか理解できなかつた。そんな様子のモモンガに、リグリットは笑う。

「なんだい、不満かい？」

「いや、まさか合格にするとは思わなくて」

「『合格』とは言つてないよ。前線には出さない。雑用として使うだけさ」

「なるほど……」

まあ、と一言置いて、リグリットは続ける。

「アツシユもお嬢ちゃんも、どちらも素質は優秀だよ。後は戦い方を仕込んでやれば良いだけさ」

「……それだけですか？」

「……はあ。そこのお嬢ちゃん、只の人間じゃがないだろう？　他人の素性は詮索しないのがモットーなんだけどね」

「このまま野放しにしたところで、結局はろくな目に会わないのが見えてる。なら、保護者のアンタと一緒にの方が良いだろう?」

リグリットの言葉に、今更ながらインベルンの姿をまじまじと見直す。

紅い瞳、白い肌、特徴的な八重歯。確かに普通の人間とは変わっているところが多くすぎる。

「（盲点だつた。くそ、確かに言わればそりやそうだ。ダメだな、アンドツドだとそういう『常識』に疎いのだろうか……）」

何か仮面的な物で隠すのが良いのだろうか。でも持つてゐる嫉妬マスクくらいだしなあ。着けてくれるかな。

あつただらうかと、持ち物をぼんやりと思い出していると、さて、と手を軽く打つて彼女が言う。

軽い口調とは反対に、眼を好戦的にして。

「ところでモモンさん。一つアンタとも手合わせしたいもんだね」「私は入団の筈では？」

「よく有りがちなランク付けだよ。因みに私はリーダー以外には負けたことがない。素手ゴロではね」

「……つまりはN.O. 2ですか」

「そういうこと。勝負の内容はシンプルに、先に相手に有効打を与えた方の勝ちって事で」

言うが同時に、リグリットが構える。先ほどのアッショ達と戦つたときは別人の様に、ピリピリとした空気がモモンガに突き刺さつていた。

殺すなら時間は掛からない、だが負けを認めさせるなら話は別だ。さて、どうするか。

「言つておくけど、戦わない、は無しだよ。そんなことしたらさつきの話は無かつたことにするからね」

「分かつてますよ。ただ……」

構えている相手には下手に攻撃した所で耐えるか避けられる。ならば。

相手から攻めさせれば良い。

「——どうやつて貴女を倒すか、考えていたところですよ」「……へえ」

リグリットの空気が僅かに変わる。先程までの此方の動きを観察する気配が、僅かだが揺らいだ。

身体から力を抜いて、リラックスした状態でリグリットと向かい合う。簡単に言えば、『此方はお前をナメてるぞ』という意思表示だ。

「(こ)の手の挑発は散々教わったからな。……よし、これで向こうが攻めて来るのを待——」

「——あー、忘れてたわ。こりゃあ失敗失敗」

突然。

突然思い出したかのように片手を額に当て空を仰ぐリグリットに、モモンガは戸惑いつつも警戒を強めた。

あれだけ漂っていた敵意と闘志が、さっぱりと消えている。

一歩一歩、ゆっくりとモモンガへ歩を進めながら、リグリットは口を開く。

「リーダーに、異様に強い奴に会つたらこう聞けって言われてたの、忘れてたよ。あはは」

緊張感のないその言葉とは裏腹に漂う空氣に、モモンガは思わず構える。

なんだ。コイツは何が言いたい？

無い筈の心臓がばくばくと鳴る。無い筈の肌が粟立つ。嫌な予感がする。此方から仕掛けるか？

——そんな考えが頭を走るなかで、あの “<sup>ト</sup><sup>ラ</sup><sup>ウ</sup><sup>マ</sup>白銀の鎧” が、一瞬だけよぎつた。

「アンタ、 “プレイヤー” ？」

時間が止まつた。

喉に何かがつつかえて、上手く言葉が吐き出せない。

コイツは今なんて言つた？

プレイヤー。

—— “リーダーに、強い奴に会つたらこう聞けつて言われてたの、忘れてたよ”

視界が大きくぶれるのを感じて、モモンガははつと意識を取り戻した。

目の前には脚を振り上げたりグリット。そしてその脚は、自分の首もとへと伸びていた。

幾秒かの間が開いて、リグリットはガツツポーズを決めた。

「つし、 アタシの勝ちだね！」

「……つあ」

「なんだい、 鳩が豆鉄砲喰らつた様な顔してさ」

ケラケラと楽しげに笑うリグリットを横目に見ながら、モモンガは鎧に着いた汚れを手で払う。正確には、そのフリだが。

「(確定だ。コイツら、 “英雄団” のリーダーはプレイヤーだ)」

現状分かる情報は、少なくともリグリットよりは強いこと。下手をすればレベル100の可能性もある。

いきなり襲いかかってくる事はないと思うが、警戒しない理由はない。

だが、入団はもう決定された事だ。自分で決めた以上、ここで急に断つてしまえばそれこそ疚しい事があると知らせていくことになる。

それに、此方がプレイヤーに関係する何かとはバレたようでもある。

なら、下手に騒がず、大人しく従っている方が良い筈だ。

モモンガがそう頭の中で算段をつけていると、リグリットがさて、と嬉しげに声を上げる。

その声に気が付いたのか、気を失っていた二人も、何事か唸りながら身を起こした。

「なら、身支度もあるだろうし、今日は一旦解散だね。明日の朝、迎えに行くからそれまでに準備しておいてよ?」

「ああ、分かった」

まだ満足に動けない二人に肩を貸しながら、モモンガは肩越しに振り向いて返事する。

二人が何か言いたげにしていたが、良いから任せておけ、と強引に引き摺つて帰路に着いた。

## 英雄 4—2

——人が何かを怖れ、警戒する理由、それは何だろうか？細かく分ければ数限りないが、たつた一つでまとめるならば、それは“見た目”だと言える。

例えば大きさ。

生き物は己より大きな他の者を本能的に怖れる、警戒する。例えば容貌。

自分達とは違う見た目であり、それが己に害をなすかも知れなれば、それは警戒の対象だ。

まあ、そんなこんなで、人が怖れる、警戒する理由なんてものは第一に“見た目”だと——個人的には言える。

時間は夜。窓から差す薄い月明かりが、部屋の一部を照らしていた。

「……」

帰った家の自室で、灯りを点げず、部屋を暗くしたままモモンガは一人考えていた。

それは、肉体の無いまま入団、行動するか否か。

リグリットからかなりの強者として、“英雄団”には話が通されるだろう。なら、少しは強めに出ても単独、または少数での行動が許されるかもしれない。

事実、リグリットは勧誘としてこの街に単独で来ている。

「……ダメだな」

そこまで考えても、何処か納得の出来ない部分があつた。理由は分かる、解決の仕方も……分かる。

「モモンさん？」

キイ、と音を上げて扉を開けてインベルンが顔を覗かせる。

不意の事に少し何も言えずに居ると、インベルンが焦つたように言う。

「も、申し訳ありません。ノックはしたのですが、何か呴かれていた様子で返事が返つてこず何事かと……」

「そうか。ノックし——何か呴いてた?」

「え、はい。はつきりとは聞こえませんでしたが」

そつかー、そうかあ。

誤魔化すようにあははと笑つて目線を逸らす。……そうだ、ちょうど良い。

お前の意見を聞きたい、と言うと小首を傾げながらも勧めた椅子に相対して座つた。

次の言葉を待つ彼女に、内心で一息吐いてから切り出す。

「明日から合流する英雄団の事なんだが、少し考える事があつてだな」「はい」

「おそらく私が、『特殊な人間』であることは既に気付かれている。……そこでだ、この仮の姿で過ごすべきか、それとも本来の姿に戻すべきか、どちらが良いと思う?」

「本来の姿かと」

即答だつた。

マジでか、と少し驚いていると、インベルンが口を開く。

「失礼を承知で言いますが、モモンガ様の本来の姿というのは、あの漆黒のロープに身を包んだ姿なのですか?」

「……そうだが?」

何を言つて いるんだ?と思つて いると、更に続ける。

「ですが先程、『特殊な人間』。自分の事を、人間と仰られました」

あ。

「昼の戦いの際、あの女が言つていた『プレイヤー』、それと関係があるのですか?……おそらく、アッシュも」

「……何故、そう思う？」

「モモンガ様の様な容姿の者を見たことも聞いたことも無いことが一つ。アツシユ程の年齢の者が、あんな異常な力を持つていてる筈がありませんから」

「」

そうだ。そうだった。

異常なのだ。モモンガとアツシユは。

少なくとも、『国堕とし』とまで言われる化け物を一人で退治できる程には。

「モモンガ様は、『プレイヤー』とは、一体どのような者なのです？もし、差し支えなければ教えていただけませんか？」

――どうする。

考える、考える。インベルンに『ユグドラシル』の事を教えて、どうなるか

いつの間にか月明かりも無くなり、光源一つ無くなつた暗い部屋で静寂が二人に降りる。

考え、そして悩むモモンガに、インベルンが口を開いた。

「――私の事も、信じて貰えませんか」

「……え」

「いつも、何かを隠している節がモモンガ様にはあります。初めて出会った時から。

確かに、モモンガ様程の腕の方ならば、様々な出来事を経験されたのでしょう。他人の事を、簡単には信用出来ないでしょう  
ですが、そのように苦悩される程であれば、どうかその荷を私にも分けてはくれませんか？」

一息で言つた後に、はあつ、と深く息を吐くのが分かつた。

真つ直ぐ、真つ直ぐに此方の目を見つめるインベルンに、何も言うことが出来なかつた。

そうなのだと、改めて気付かされた。

何故アツシユを、他のプレイヤーをそこまで気にして、尚且つ対策を講じ、警戒するか？

簡単な事だ。

この世界で最も、モモンガに対しての有効打を所有している存在だからだ。

例えば武器、例えば魔法、例えばスキル、そしてワールドアイテム。

白銀の騎士と出会った時と同じ、恐怖を感じる。ゲームとは違う。死ねば、本当に死んでしまうのだ。

——たつた一人で。

「大丈夫です、モモンガ様」

いつの間にか、インベルンが近付き、優しく手を包み込んでくれていた。じんわりとした温もりが、モモンガの恐怖をほどいていく。

「私は、絶対に何処にも行きませんから」

「……」

その言葉に、何も言えなかつた。

“鎮静化”を伴うエフェクトが、ぼんやりと身体を覆う。勿論、アツシユも。と彼女ははにかんで笑い、続ける。

「頼れる仲間が居ないなら、まずは私が、その一人目になります。アツシユが二人目で、どんどん作っていきましょう！」

インベルンの言葉に、何も言い返せない。頭の中で色々とぐちゃぐちやになつてているが、そんなものの関係なしにインベルンは続ける。

「私はこの先、”国墮とし”としての罪を清算するため、世界を旅します。……モモンガ様は、どうされますか？」

言葉を促され、何を言うべきか詰まる。固まつた身体に、インベルンが顔を覗き込むように近付く。

「本当のモモンガ様は、何がしたいんですか？」

少しの間を置いて、改めてインベルンを見直す。初めて出会った時は、随分と変わった。

人見知りがちで、気弱な性格ではなくなつた。吹っ切れた、というのが正しいのだろうか。ヤル気に満ちた、快活な顔をしている。

この世界に来る前を思い出す。

『ユグドラシル』が終わるとなつて、無氣力氣味だつた自分の事を。

——決めた。

「ありがとう、インベルン」

頭を撫でれば、嬉しそうに眼を細める。革の手袋越しの骨の感触しかしないだろうに、本当に嬉しそうに。

「私は、——俺は、この世界を冒険したい。世界中の、隅々まで」

「はいっ！」

簡潔ながらの、拙い決意表明であつたが、インベルンは賛同するようになつた。

それに応えるように、モモンガはよし、と立ち上がる。

「そうとなればやることがあるな。多いが一つ一つこなして行こう。まずは人間らしく振る舞う事だ。この身体だとどうにもアンデッド寄りになる」

「そうですね……。肉体の方はありませんが、どうされるんですか？」  
「それは前々からの考えがある。ふふふ、びっくりするぞ、インベルン。腰を抜かすなよ？」

「楽しみにしておきます。……それより、一つよろしいですか？」  
「ん、何だ？」

うきうきとした気分で振り返れば、インベルンが苦笑いで空間を指

していた。

「灯りを点けるのを日常的に行うことも、お忘れなく。部屋、真っ暗ですから」

初めて出会った時、その見た目の恐ろしさに震え上がった次に、感じた事があつた。

此方の事を、同情するような目を。——虐げられる事を、知つている目を。

「私と共に来ないか?」

言葉とは違つて何処か不安そうな声音で差し出された手。

——その手を掴むのに、私に躊躇いは無かつた。